

編集後記

日本医史学雑誌第67巻2号をお届けいたします。今号は第122回日本医史学会学術大会の抄録号、演題抄録65題と緊急提言1題、教育講演2題、基調講演1題、研究発表2題、特別講演2題より構成され、昨年来のCOVID-19の流行、およびそれによる大会のオンライン開催を反映した内容となっています。

COVID-19の流行に関しては、私個人のことで大変恐縮ですが、昨年はこの流行に関連して、100年前の世界的流行である“スペインかぜ”流行と衛生行政の関わりを研究し、昨年11月の月例会(オンライン開催)でも発表いたしました。“スペインかぜ”流行当時の伝染病予防法は、コレラ対策を基準としており、感染源の特定や感染経路の追跡、感染者の隔離が有効であることを前提としていたのに対して、“スペインかぜ”には、人々の理解と行動という“ポピュレーション・アプローチ”が必要であったのに、当時の内務省衛生局は、それに適応できなかったのではないかと、この考察を得ました。当時の内務省衛生局の対応は、公衆衛生の基本中の基本である、(1)行政、専門家と住民との信頼関係の維持、と、(2)公正で科学的な情報の速やかな共有、が、なにより重要であることを、反面教師的に示しており、皮肉なことではありますが、昨年来のCOVID-19の流行によって、歴史的研究が現代の問題にも生かされることが示されたのではないかと、考えています。

当編集委員会も、COVID-19流行に関連して、先日、オンラインにて、座談会「医史学から展望するCOVID-19パンデミック」を持ちました。各委員が医史学会員としてプレゼンテーションと意見交換を行い、議論が医史学会、医史学雑誌へと広がることを期待しての企画です。

来るべき第122回日本医史学会学術大会、また上述の企画などをきっかけに、活発な議論が行われるよう、また、論文としてもご投稿いただけるよう、編集委員一同、お待ちしております。

(逢見 憲一)